

2020年11月1日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「神殿より偉大なもの」マタイ 11章 25～30節

主任牧師 加藤 誠

「言っておくが、神殿より偉大なものがここにある」(マタイによる福音書12章6節)。

「そのころ、ある安息日にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になったので、麦の穂を摘んで食べ始めた」(12章1節)。麦畑を歩きながら麦の穂をつまみ食いするなど、何とも行儀の悪い弟子たちの姿である。他人の畑に無断で入って麦の穂をつまみ食いすることがゆるされるのだろうか。実は、当時のユダヤでは貧しい人たちが他人の畑に入って落穂を拾うことが認められており、律法では「畑の所有者は、寄留者、寡婦、孤児たちが麦の落穂を拾うことができるように、穂を刈り尽くしてはならない」(申命記 24章 19節以下)と教えられていた。今の日本のように社会保障制度のない二千年前の時代に、畑の所有者のように富を豊かに持つ者が貧しさの中にある者を思いやって助けるように教えられていたことに驚かされる。

それにしても、主イエスに従っていた弟子たちがここまで空腹だったとは、どういふことなのだろう。弟子たちは漁師という仕事を捨てたり、収税所の役人としての収入を捨てて、主イエスの巡回伝道にお供した者たちであり、何も収入がないため、行く先々で人々の厚意、差し入れにすがってお腹を満たすしほかなかったのである。五千人の供食の話では、「五つのパンと二匹の魚」を弟子たちのところに持ってきた少年が出てくるが、もしかすると、お腹をすかせている弟子たちに届けられた差し入れだったのかもしれないと想像する。この場面のような日は、残念ながら差し入れが足りず、他人の畑に入って麦の穂で腹を満たすしほかなかったのだろう。

しかし、その姿を見たファリサイ派の人たちが「これはしめた」とばかりにやってきて、「お前さんたちは安息日にしてはいけないことをしているではないか！」と主イエスを問い詰めた。安息日は礼拝のために聖別された日。一切の労働は禁止されており、かまどで火を焚いてパンを焼いたり、料理することも禁じられていたので、「働いてはいけない、聖なる安息日にお前さんたちは麦の穂を摘むという労働をしている！」と、ファリサイの人びとは厳しく咎めたのである。

その彼らに対し、主イエスはダビデ王のエピソードを用いて反論した。若き日のダビデがサウル王に仕えていたころ、サウル王がダビデの人気に嫉妬して殺そうと怒りを燃やした際、逃げたダビデが逃亡先で緊急避難的に祭壇に供えられていたパンを食べたことがあったではないか(サムエル記上 21章)と。また「安息日に労働をしてはならないとあなたがたは言うが、神殿の祭司たちは礼拝の奉仕のために働いているではないか！」と言って、安息日に神様を礼拝する労働がゆるされているのと同様に、生きるためにやむを得ず麦の穂を摘んで飢えをしのがざるを得ない貧しい人たちの労働はゆるされるべきではないか！と反論したのだった。

つまり主イエスは、安息日に私たちが神さまを大切に思い礼拝すること、その

安息日にも働かざるを得ない、その日その日を懸命に生きている人びとを大切に覚えていくことは、どちらも同じように大切なことなのだ！と言い抜かれたのである。ファリサイ派の人びとが、律法の戒めを表面上だけで解釈し、安息日を守ることができずに必死で働かざるを得ない人びとのことを、「律法を知らない、理解できない、哀れな民だ」と断罪していたことへの厳しい批判がそこには込められている。主イエスは「神を大切に礼拝する安息日こそ、隣人を大切に覚える日であるべきだ」と言われたのである。

申命記 24 章の「人道上の規定」（5 節以下）を読んでみたい。特に 14 節・15 節、19 節以下を。これらの戒めを読んでいると、神様を真ん中に大切にすることと、その日を生きる厳しさの中に置かれている隣人を覚えることは切り離せないことであることが響いてくる。この神様の心を大切に生きることは「神殿よりも偉大なもの（大切なもの）だ！」と主イエスは言われたのである。

先日、自宅で豚肉を解体し逮捕されたベトナム人の技能実習生の犯罪がニュースになっていた。盗みは犯罪であり許されないことだが、この出来事の背景にある、もっと根本的なことを考えるように促されているように思う。先ほど読んだ申命記では、イスラエルの人びとに「あなたたちもかつてはエジプトで寄留者としての苦労を体験したではないか。だから、あなたの地に住む寄留者の彼らの立場に身を置いて考えてみなさいと。

千葉県のある K 教会の M 牧師と話していて、その教会の礼拝に来ているインドネシアとフィリピンの青年の話聞いた。一人は日本の建築現場で働く技能実習生の青年。日本語が不得手なので、親方から「お前はバカだ」とけなされながら毎日働いている。言葉が分からない、要領が悪い、理解が鈍い、「だからバカだ！」と。その彼は日曜日の礼拝で自分を取り戻すのだという。彼にとって、日曜日は聖書の主イエスが教えてくださった神さまの愛のまなざしを受けとり、自分自身を取り戻す大切な日なのだ。またもう一人の、やはり建設現場で働いている青年は資格試験になかなか受からない。日本語が難しいので苦労しているとのこと。すると親方からこう言われた。「お前の信じてる神さまは、無力なダメな神さまだ。教会に行くのを止める！」と。それでも彼は一週間に一度、一時間、電車とバスを乗り継いで礼拝に通ってくる。毎日が忙しく、疲れているけれど、聖書のイエスさまと出会うために来るのだと。

この二人の青年が、日曜日の礼拝を大切にする姿に、本来の安息日とは何かを教えられる。神さまの前に一人ひとりがほんとうの安息をいただいていく日。神さまの愛のまなざしを受け取って、神さまに大切にされている自分を取り戻し、お互いを大切に覚え合っていく日。

「ここに神殿よりも偉大なものがある」。神殿という建物よりも、律法の戒めを言葉だけ大切にすることよりも、ずっと大切なものを主イエスはここで教えてくださった。この主イエスから本来の安息をいただいて、分かち合っていきたい。